

豊かに引き継ぐ「ストック型社会」 思考法から生まれた多くの技術開発



岡本久人氏

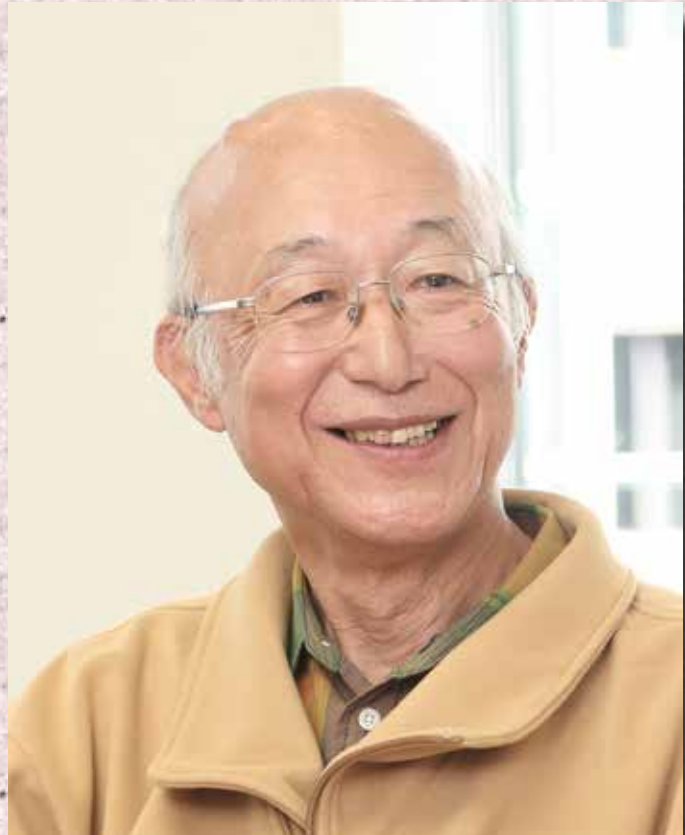
次世代システム研究会 会長
環境省 環境カウンセラー

1944年1月生まれ 九州出身。北九州大学外国語学部卒。新日鐵八幡製鐵所入社後、ローマ事務所技術系駐在員（1984～1992）、生産技術、IE、OR、経営管理、技術開発、省エネ（BASE法）社外経営コンサル（含む海外）、海外技術協力、システム開発等に関わる（株）九州テクノリサーチ 地球環境プロジェクト部長（財）日本野鳥の会評議員、平成12年4月～九州国際大学次世代システム研究所長、九州国際大学特任教授。内閣官房 環境モデル都市低炭素社会づくり委員会委員、文部科学省産学官連携コーディネーター。内閣府地方創生本部「ストック型社会の実現に向けた情報基盤の整備に関する検討委員会」委員他。著書：「生態系が語る日本再生」/ECO-ECO Economy as Ecology, 45分で分かる未来へのシナリオ「ストック型社会」等多数、他に写真集「隼」、趣味は多数。

エリートに囲まれて「何故」を連発した文科系
これではいけないと大学へ、やがて重責を担ってローマへ
見えたものが総てじゃなくそこから如何に全体を推定するか
様々な側面から物事を見ていくのが自然科学の基本だと

あなたの住む町を後世へ 目的に焦点をあてた新しい

豊かな環境の中ではバラツキは大きく貧困社会では群れる
自分の時間を取り戻すゆとりと文化の基本は生息環境つまりインフラと知る
これが問題だと言う(診断)だけじゃなく具体的な治療法を示す
後は若者たちに任せ引き際は綺麗にしたい



市田則孝氏

大宜味村生物多様性センター長
NPO 法人やんばる舎理事長

1946年東京出身、東京水産大学増殖科卒、1969年財団法人山階鳥類研究所嘱託(鳥類標識調査)、1984年財団法人日本野鳥の会常務理事兼事務局長、1995年同会常務理事兼国際センター所長、2001年同会退任。2007年バードライフ・インターナショナル副会長就任、2010年同副会長退任、特別顧問就任。2008年東北大学生態適応GCOE環境機関コンソーシアム会長、2011年バタフライ・ウォッチング協会代表、2015年大宜味村生物多様性センター長、2017年NPOやんばる舎理事長、2018年バードライフ・インターナショナル東京の特別顧問、現在に至る。その他多くの環境自然保護に携わる。王立鳥類保護協会(RSPB)ゴールドメダル受賞。しぐさでわかる身近な野鳥、トキの研究など著書多数。

自然保護活動を広めた 日本野鳥の会のしかけ

市田 バトンを繋いで頂けるのは、次世代システム研究会の会長、岡本久人さんしかいないと指名させて頂きました。日本野鳥の会が事務所を開いた1970年頃から50年近いお付き合いです。それまで、

バードウォッチャーは鳥を見て楽しんでいただけでしたが、干潟が埋め立てられたり森がなくなったりするのを目の当たりにして、日本だけではなく世界中でバードウォッチャーが自然保護の旗を振るようになりました。野鳥の会ができた頃「日本の自然を守ろう」と動き始めたら、「本当に鳥が減ったのか、どのくらい?」と言われ、適当な返事は出来なかった時、北九州で活動していた岡本さんと出会いました。岡本さんは文科系なのに、製鉄所全体を見て「ここは必要か」とか「ここはこうやったら」等と変えていくんです。鳥の調査も、日本の鳥の保護するにはベースをきちんと調べ、それに基づいて発言しなくてはいけないと、岡

本さんの発案で「テクニカルチーム」というのを九州で作って活動しました。

岡本 30歳以下、独身の若者20人ぐらいでスタートし、登録者は最大で100人を超えたこともありました。調査方法ではなく物事の考え方を訓練し、その結果をまとめたのが『野鳥調査マニュアル』定量調査の考え方と進め方』という本です。

市田 合宿はとても面白く未だに忘れられません。そこで岡本さんが問題を出します。「今、標高7000mぐらいの山奥の山小屋にいたとして、あなたのポストがタバコを買って来い」と言つたとする。さあ、どうする?」とかね。「自分で買いに行く」「煙草は止めた方がいい」と説得する」等いろんな方法があるでしょ。そういうトレーニングによって物事の考え方は一つじゃないという

ことが分かるし「調査方法もまただ闇雲にやるんじゃないで、何の為にやるのか、どういう方法があるか、絵を考えてやる」という話を聞いて驚きました。野鳥の会がある程度戦略的に様々な事が出来たのは、岡本さんとの出会いが大きかったです

よ。

岡本 私は貴方から言われた事をやっているだけで、私は猿回しの猿(笑) その頃は、IE(経営工学)とかOR(経営数学)等が日本で開花した頃、私は各地の工場で「こう改善しろ」「こういう風に技術開発をしろ」という役割を担っていた一方、地方に野鳥の会を作って無人島の調査にも行きました。

市田 当時の野鳥の会は全国組織としてまとまっておらず、バラバラに活動していました。そこに事務局ができたので統合して、「日本野鳥の会」にしようという時に、会いに行ったのが岡本さんでした。

岡本 当時は環境問題が社会化した頃で、例えば干潟を埋め立てて発電所を造ると渡り鳥が来なくなる、と自然保護をしたい人は反対運動を起す。さる大学の先生まで反対運動に行くので「何故干潟が必要なのか、埋め立てたら渡り鳥はどうなる



岡本氏の著書

のか、そもそも渡り鳥がどのぐらい来ているのかを、定量的に測定するのが学問の役割で、そういう事をきちんとやらないと本当の自然保護活動にはなりません」と言っても、学者は「そんな理論はない」と。そんな時、別の大学の先生に「君の理論を自然保護に活用したら」と言われました。

市田 仕事で確立した理論を応用する、ということですね。

岡本 例えば、日本列島を通過す

る渡り鳥や、干潟の総ての生物をどうやって測るのか具体的な方法がありません。日本野鳥の会も「理念」と「理論」が必要という事でまとめ、そもそも調査は何の為にやるのか、「母集団」がどうなっているのかを推察します。生態系が駄目になるとわかったら、具体的な提案を出す。このように理論として自然保護活動を訴えていく、結果、当時の時代社会のニーズが一致したんです。

市田 鳥の数と言っても何を数えているか、その意味が重要だと。未だに世界中で、鳥の数を数える時は、山でも林でも2kmぐらいのルートを決めて、その道路の周りの50m程の範囲で左右両側を見ながら種類と数を確認して報告します。でも、梢にいる鳥は見つけやすいですが、藪に隠れているのは見逃すのに、その違いを無視しているのはおかしいと、ロープを張って藪の中を確認したら結構いました。

岡本 鳥も、目立ちたがり屋もいれば隠れてしまう鳥もいます。環境省から最初に頼まれたカンムリワシの調査でも、そもそも西表島にいる実際のカンムリワシが、観測してい

る時間帯に人間から見える場所に現れる確率がどのぐらいかが分かっているかという意味がありません。このように、本当の自然保護活動の在り方をテクニカルチームの皆で確かめていました。

市田 調査に限らず他の活動でも、何の為の活動でどうすればいいのかが岡本さんから学んで、調査以外にも影響を受けました。

岡本 目的が「自然保護」なら鳥を調べるだけじゃなく、自然が好きの人を増やす方法も自然保護です。市田さんは「バードウォッチング」と言う言葉や「サンクチュアリ」を始めて、一般の人にも興味を持ってもらえるようにしたことで、日本野鳥の会がどんどん大きくなっていき

市田 そもそも英国で始まったバードウォッチングは、凶鑑で調べておいて、フィールドに持って行かず、現地での種を判別する、これがバードウォッチングだ、と言うんですが、日本では皆持って歩いていきます。そこで「難しい鳥は分からなくとも、3種類でも分かればいい」と言うと、ベテランから「彼は鳥が

分からないからそう言うんだ」と言われましたよ。

岡本 鳥オタクの様な人ばかりでは自然保護は出来ません。鳥にあまり興味はないけど、流行り始めたアウトドアのファッションのファンを取り込めたのは大きかったですね。貴方がアウトドアのブランドに働きかけて業界にブームをつくり、業界発展するし、双眼鏡やカメラ業界も発展する。彼らは彼らで「自然の中で野鳥を見るバードウォッチングはいい」と発信してくれて広まりました。

市田 事務局発足当初から岡本さんにお力添え頂いたおかげで、日本野鳥の会は大きく発展できました。

目的のための手段を探る

論理的思考とは

岡本 日本野鳥の会が発展している最中、駐在員として1984年から92年までローマに行くことになりました。係長の時、ナポリの潰れかけた会社へひとりで行って1年以内を立て直さなきゃいけないんです。言葉の問題もあります。何より

「Do in Rome as the Romans do. (郷に入れば郷に従え)」という諺がありますが、「as more than Romans do.」つまり「より一層ローマ人の様に」でないとい

(笑) 彼らから「ケ・ブラボー!」と言われないと尊敬は得られません。潰れかけた会社は現場で油まみれの下請けのおじさんと仲よくなって、いろんな話が聞ける様になると、理論上は1日に100の生産が出る筈なのにどうしても20程足りない、それで夜こっそり現場に行くと、ワイヤーが切れても何もしない人間がいて、上司に「何とかしろ」と言う躊躇するんです。何故ならそれはカモツラだったの(笑)

市田 つまりマフィアの一員?

岡本 彼に仕事をさせるにはカモツラの親分に会うしかないのですが、日本人形を土産に交渉しに行きました。とても紳士で賢くて理解してくれて、「貴方の言う通りだ」と言って協力してくれて、成績がグッと上がりました。語弊があるかもしれませんが、ヒト科日本人種は絶滅型で、このままでは衰退するしかあり



岡本久人氏

ません。それを「問題だ」と言う人はいっぱいいますが、治療法を言わないと改善出来ません。経済も、NHKが毎年正月に特集番組『欲望の資本主義』や最近では「ホモ・デウス」を取り上げて、未来予測を放送しています。会社も技術上の問題だけじゃなくて、様々な側面から物事を見て行くのが自然科学の基本だと、野鳥の会を通じて学びました。無人島の調査や、猛禽の保護等、違う視点があってそれを体験出来たのは、すごいことでした。

市田 岡本さんは技術者として

じゃなく事務系で入社して、いつの間にか技術のリーダーになったでしょ。どうしてですか？

岡本 「運」です（笑） 社内には東大や京大で最先端の経営学を学んだ人達が大勢いてそこに、高卒の事務系として入社した私を丁稚の様なつもりで配属したと思います。彼らの言う言葉が解らないから「何故？」って訊くと、皆が解り易く説明してくれました。製鉄の技術とか精錬の技術、冶金、機械、電気、計装、システム、等々。でも彼らのジョークが分からないこともあった

ので「これは大学行かなきゃ駄目だ」と思って、その後、行かせてもらいました。当時、「鉄は国家なり」と言われていました。上司から「鉄というのは産業の基盤なんだ、鉄で仕事をするには経済全体を考えなくてはいけない。造船、機械、自動車、土木等の材料だから、全体を考えながら鉄を考える。それが、鉄は国家なり」の心だ」と教えられました。

市田 それで、技術開発にも携わるようになったんですか。

岡本 第一次オイルショックで技術屋さんは、知識を全部吐き出しました。そこに来ると思っていなかった第二次オイルショックが来てしまったので、本社の入社当時の先輩が、「岡本、何とかしろ」と電話をかけてきました（笑）「BASE法」というイノベーションプログラムの開発とその応用について、前出の野鳥の本にも書いていますが、要するに最終的な目的に到達するまでに物事の戦略をどのように考えていくかです。仮に鯛がここに1匹あるとして、何通りの料理法を考えられますか？

市田 焼く、煮る、干す……。

岡本 知識や経験だけだと50通りぐらいは考えられますか？論理的に考えると「魚の料理」ということを目的と達成する手段で因数分解する。エレメントとして「形を変える」、「熱の加え方」、「味のつけ方」が考えられます。「形を変える」は、姿のまま、2枚に卸す、3枚に卸す、薄切りにする、ミンチにする……と10通りぐらい、熱の加え方も、10通り以上、生、フライ、天ぷら、蒸す、煮る、炙る、発酵させる等々。味のバリエーションも無限です。そして「何と組み合わせるか」その4つのバリエーションだけでも、10通りずつ考えれば1万通りの料理法が考えられる筈です。

市田 そうですね。

岡本 ただ、選ぶのは一つです。目的が何かによって選ぶものは変わってきます。省エネルギーなのか、新技術の品質の開発なのか、驚きをつくるのか、まず多様な選択肢を考えることです。製鉄技術も同様で、原料を溶鉱炉で還元して転炉で精錬して圧延する。製品として出荷するまでには、選択肢がいっぱいあります。目的は何か焦点を当てられ

ば、全く新しいプロセスが考えられます。室蘭から大分まで全国各地の工場を廻って多数の新技術が生まれたと思います。私も当時70を越える特許を持っていて、その一つが「溶鉱炉がいらぬ製鉄技術」でした。

市田 溶鉱炉がいらぬんですか？
岡本 そうです。日本の様にシステムティックに、心一つに皆が共通の考えで進めていく方法もいいですが、変化があった時に選択肢がないんですよ。現代は技術革新がめまぐるしく進み、いろんな選択肢が生まれているのに論理的に考えるという訓練をしていないからです。

心をひとつにする日本
 多様性のイタリア

岡本 製鉄所を例にとると、入社時には人を選んで採用します。そしてそれぞれの部門に最適な人を配置し徹底的に教育して、皆が心一つに出来るような組織が出来ました。設備、生産管理システムはこうで

す、年間1000万トンでピシッと生産します。ところが、イタリアのタラントと同じ設備、同じシステムの製鉄所を造つたら、700万トンしか出てこない(笑)何故？となるわけですが、要は人間のバラつきが違うんです。イタリア人は高炉から転炉まで、溶けた鉄をトピードーカーという長い特殊な貨車で運んで、次の工程で液体の鉄を流し込むんですが、作業員が100人いたら、100人が1か月に1回か2か月に1回、100回に1回間違うと、15分で行くのが25分になったりして、溶けた鉄はその10分の差で固まって流れなくなる、しかも、その1台だけじゃなく、前の工程も後ろの工程もつかえて駄目になります。

市田 日本ではあり得ないですね。

岡本 イタリアだと、誰かそっぽを向く人間がいます。日本人に言わせたら「イタリア人が馬鹿だから」と言いますが、そうではありません。線材会社のワイヤーを巻いてたおじさんから、「ワイヤーができたからパーティーにおいでよ」と招待されて

行つたら、お城の様な家に住んでいて、皆正装して「今日は日本人が来るから日本文学の『細雪』について語り合おう」と(笑)愕然としたね。日本で同じシチュエーションなら、赤提灯で仕事の話か上司の悪口ですよ。

市田 その差は大きいですね(笑)
岡本 それは大きな多様性があるということ、バラつきがある社会では、「ちょっとよそ見して煙草吸ってた」のもありなんです。職を失つても困らず、バカンスの金を稼ぐ為に仕事をしているのと、この仕事を

失くしたら家族を露頭に迷わせるのと決定的な違いがあります。生物も、豊かな環境の中ではバラつきは大きく、貧困な社会ではバラつきが小さくなります。ホシムクドリやヒヨドリ等弱い鳥が渡る時はイワシの群れみたいに群れますが、強い鳥は離散的ですね。

市田 日本では、皆一所懸命いても小さな家に住んでいる。「この差は何」というので、社会システムに目を向けるようになったんですかね？

岡本 ローマ駐在の頃、バードラ



市田則孝氏

イフの本部が英国にあつてよく遊びに来てくれましたね。

市田 一緒に本「野鳥調査マニュアル」定量調査の考え方と進め方」を書いていた時期でしたね。

岡本 ヨーロッパには鷹匠がいて、世界の野鳥保護の人達は「彼らは野生の鷹を捕まえてきている筈だ」と言っていました。しかし実際は、何と人工繁殖でした。その技術を応用すれば、絶滅危惧種も繁殖して増やせると驚きました。

市田 それで、ハンガリーまで見に行きましたね。

岡本 「フィリピンサルクイワシ（現呼称はフィリピンワシ）を保護しよう」というキャンペーンで日本野鳥の会が募金を集めていました。熱帯雨林を伐つてるといのでローマのFAO（国際連合食料農業機関）の本部に文句を言いに行ったら、「あの森を食つてるのは日本人だ」とデータを見せられて（笑）シヨックでしたねえ。

市田 そんな事があつたんですね。

岡本 市田さんも、その頃から実際に動き始めましたね。

市田 渡り鳥は世界中を渡っていくでしょ。今はないと思うけど「愛鳥月間」というのが中国にあつて、飛んできた鳥を全部焼鳥にして愛しちゃうという……ね。あんまりひどいので、中国政府に申し入れをしたから止めたとは思いますが。アジアでは、野鳥はまだ「食べ物」の感覚です。1980年頃に韓国と日本で半々の合同チームを作って、釜山の洛東江という川で水鳥の調査をやったんですが、その時学生だったイ・ウーシンさんがすっかり鳥に魅せられて、北大で学位を取って、現在はソウル大学の教授ですよ。

岡本 あの時代は、非常に多様な人を創り出す時代だったのかもしれないですね。日本野鳥の会が「歌詠みの会」みたいでしたが、社会の変化に応じて脱皮して自然保護を始め、権利と義務は同じだ、保護という「権利」を主張するなら、「何故か」を明確にし、世論を作る「義務」を負うということを貴方が理解して実行して、多くの人がそれに倣っていきましたからね。あれは説得力がありました。貴方がいなくなったら出来なかつたと思います。

市田 それはわからないよ。誰かやったかもしれないし。

目的と手段と人数と。組織の運営を考える

市田 岡本さんにはいろんな事を教わりました。日本野鳥の会のスタッフも、随分勉強になったと思います。ニコニコしながらバチツと言うんですよ。

岡本 60歳から10年間、九州国際大学の教員をやりました。学生が多い時は1科目に250人ぐらいでしたが絶対に寝ませんでした。

市田 それはすごいねえ。

岡本 スポーツをやつて疲れている学生でさえ、「楽しみです」と。

市田 私も早稲田や慶應で短期の授業をやつたことがあります。教室の後ろの半分ぐらいは寝てましたよ。

岡本 最初の授業でこの1時間半の授業に、どのぐらいお金がかかっているか、君の人生におけるこの1時間半を計算させるんです。入学金、授業料、住宅費、交通費等、その中で授業時間を計算すると、大体5千

円から1万円です。「それを理解した上でなら寝るのも勝手だよ」と言うと、皆、目が爛々としてきてね。

市田 楽しくなかつたらついてきませんし、楽しい方が頭に入りますよね。

岡本 そう考えると、テクニカルチームもすごい事やったよね。活動は九州だけど、全国から希望者を募つて……。青森からも来ましたね。

市田 テクニカルチームと一緒にやつた若者達は各支部に戻つてそれぞれリーダーになりました。

岡本 誰も行ったことがない「鹿児島県にある無人島、草垣島に島の調査に行く」というだけで、目的、方法、そして何が必要かを総て考えさせ、その上でどれぐらいの人間がどのぐらいの期間をかけて何をしなければいけないか計算する。そして危険もあるから応急処置の訓練が必要とか、港もないのでロッククライミングをととか、当時は携帯電話がなかったので手旗信号を覚えよう、とかね。

市田 皆で練習しました（笑）

岡本 全部クリア出来て、やるか、やらないか、やるならいつか、その

期間に全国から何人来られるか等、その結果をどんな目的に活用するかまでやりました。

市田 調査は1週間ぐらいでしたね。

岡本 私は会社員なのでクビを前提に行きました。「クビに出来るならやってみる」というぐらいの気概で「休みます」とね。

市田 重要なのは、やることを決めたらどうするかを考えさせ、その為には何を準備し誰が何をするのか、プランを自分達で作らせました。

岡本 P D C A をどうやるか、異常が起こった時にどういうアクションを取ればいいのか、危機管理から動機づけまで全て、特に測定法についてはきっちり詰めました。統計問題で、精度と信頼性を検定出来ます。草垣島にカツオドリが何個体いて、どこをどのように調べれば「この精度、信頼度のもとで、島全体のおおよその個体数がある」と言えます。

市田 調査の結果も大事ですが、どの様にするのかを学ぶ事が重要です。基本的な考え方や応用の仕方を見につけ様々なケースに対応出来る、勉強になりました。あの頃の会

員は3000人前後で、いろんな活動を通じて「増やそう」という方向になって1万人程になりましたね。

岡本 ローマに行く前、日本野鳥の会の組織だと「会員は3万人ぐらいがいい、それ以上になると組織は必ず崩壊する」と直感で言っていました。92年に帰ってきたら5万5000人になっていて「あ、これは早晩崩壊する」と思ったの(笑)

市田 崩壊はしなかったけどいろんな意見が出て(笑)まともになくなってね。

岡本 社会科学も、自然科学的にも意思の伝達の限界があると思えます。企業で最もいいのは150人程でしょう。

市田 私は5万5000人ぐらいの時に辞めたので詳しくはわかりませんが、今は3万人ぐらいだと思いますよ。

岡本 バードライフ・インターナショナルのアジア代表になられて、国際の間では又違うご苦労もあったのでは。

市田 鯨もそうですが、自然保護

の場で日本は叩かれることが多いので、「それはおかしい」と発言したりするとね、「お前は変わった日本人だな」と言われました。

日本の社会を ストック型に変える

市田 今でもバードライフには特別顧問として携わっていますが、それ、最初に岡本さんと出会ってやってきた事がベースになっていきます。岡本さんは鳥から町づくりをシフトしていきましたね。

岡本 海外に駐在してイタリアが一番長く、地中海沿岸をひとり廻りました。どの国もガツガツ働かず、人生を楽しんでいます。門番が「よかったですらうちの別荘を使いませんかと、驚くことに皆別荘を持って

いるんです。パカンスも長いから1か月も休んで何するの?」と訊ねたら、「生きているのは仕事をする為じゃないだろう? 本当は小説家になりたかった。1年に1回だけ、自分の時間が取り戻せるし、妻は絵を描いているよ」との返事でした。「これが文化だ」と、「何がそういうゆ

とりを創るのか」と考えたら、結局インフラでした。家や道路、都市、彼らは町を造る時、何世代も使えるように造ります。北九州の八幡という町は戦時中に爆撃を受けて焼野原になって、今の八幡の町が出来、そして又潰れかけています。全国知事会の時に元岩手県知事の増田寛也さんに日本で最初に潰れる町だとノミネットされました。そこで皆の意識に火がついたわけです。

市田 スペースワールドも潰れたしね。

岡本 では、どうすればいいかと八幡の人が考え始めました。イタリアにも、ペルージャヤとローマの間に爆撃を受けたテルニという町があります。鉄の町で、そこに電磁鋼板の技術を教えに行きました。実はテルニは爆撃を受けて一度は焼野原になったんですが、総てが八幡とは決定的に違う。何世代も使える町です。例えば広島とドレスデンは完全に焼野原になって、広島は復興出来ましたが何世代も使える景観は多分ありません。ドレスデンは70年かけて元の町に戻し、新区画も何世代も使えるように出来ています。その決定的

な町に戻し、新区画も何世代も使えるように出来ています。その決定的

な違いは、自然で言えば、生態系が豊かな熱帯雨林と毎年植生が変わっていく寒帯林の差です。

市田 建物も石で造っていますね。

岡本 誰もが木の文化と石の文化に置き換えませんが、現存する世界最古の木造建築、法隆寺は1300年ですよ。田舎に行けば、1000年、2000年、3000年の建物がいっぱいあります。いいものを造ってちゃんとメインテナンスすれば保てるんです。「ストック型社会」と「フロー型社会」について『生態系が語る日本再生 ECO・ECO エコノミー・アズ・エコロジー』という本は、経団連の関係者から勧められて書いた本です。やっぱりストック型に変えないと日本人は永久に貧困から抜け出せません。英国のサッチャーさんや仏国のクレソン首相は「ウサギ小屋に住んで、ネズミみたいに働かまわる。そんな文化を我が国に入れるな」と言われましたが、結局日本の自動車産業も日本式管理方式も迎えて、フロー型社会になりかけています。

市田 どっちがいいのか、を考え

る、と。

岡本 我々は総てフロー型ですよ。どこかでストック型に変えないとまずい、ということ、野鳥の会には真面目に入らず、ヒト科日本人種を保護する ECO・ECO 研究会という組織を、当時の北九州青年会議所を中心に産学官民の人達が作りしました。(実は現在の次世代STEM研究会もこれを立ち上げた人達が運営)そこに、平澤冷先生、京都大学の川井先生、日本生態学会会長の小野先生、九工大の迎学長など、錚々たる人達が同調して全国から集まってきました。当時の九州国際大学の今村副理事長が「次世代システム研究所」を同学に設立し、3、4年で基本理論を確立しましたが、これを政策にしなければならず、そんな時、地元の三原朝彦衆議院議員に「福田康夫元総理(当時は自民党土地住宅調査会長)に会いに行くといい」と言われ説明に行きました。その日、福田先生は徹夜されていて、しかも説明時間は30分しかない、そして福田先生は寝始めていましたが、自作の紙芝居で説明を始めたらず途中でパツと目を覚まして



対談を終えて

「面白かった」と膝を叩き、「だくだ騙されとるんじゃないだろうか」と。でも福田先生のブレインの方々が「これは正論です」と言っただけで、土地住宅調査会で「2000年住宅」を促進する「超長期優良住宅普及促進法」という法律ができました。

市田 そうなんですか。

岡本 でも、家だけじゃなく町全

体でないと駄目なので「環境モデル都市構想」がスタートしました。ストック型社会になれば、毎世代家を買い替えたり町を造り替えたりする生涯コストが下がり生活や社会に「ゆとり」ができて、その結果経済のコスト競争力でも勝てるようになります、いい物を作って世代を超えて長く大切にすれば資源の浪費もなくCO2は出ません。しかし福田政

権で一度は国の政策として提唱されましたが、日本でこれを普及するのは大変難しい。なぜならば国の組織（省庁）や学問の体系など、全てが専門分化していて、世代を超えた長期的視点から統合的に考え（診断）施策（治療）する環境が、現在の日本にはありません。幸い最近になって内閣府地方創生本部に「ストック型社会の実現に向けた情報基盤の整備に関する検討委員会」ができ、この考え方を広めていこうとしています。ただ広く日本社会に世論形成をすることは絶対的に難しいんです。

市田 それはどうしてですか？

岡本 戦後続いてきたフロー型社会の中で刷り込まれた日本人の頭には、「これを変えるのは無理だ」という風になってしまっています。なにしろ違いが大きすぎます。経済構造も資源や地球環境問題も、個人からは遠い問題だと思われています。世界や時代の変化を認識して適応策を考える時間も術もない。ですから最初にやるのは、身近な生活環境の推移予測を視覚的に示すシミュレーターです。スマホやパソコンで「あなた

の住んでいる町」が、放っておいたら10年後、20年後、30年後にどうなるかを3D画像で見られるように今、そのシミュレーターを作っていて、近日中には新しいバージョンが完成します。それぞれのまちのデータを入力すれば人口や収入の減少、インフラの劣化状況、そしていつ破綻するかを見ることが出来ます。すると決心がつくんですよ。30年後、つまり今の子どもや孫が大人になる頃までにこの町をこういう風に変えよう、という理想の選択肢を何通りか描けます。その時には、世界の人口が90億人を超えて資源状態はこうなっていて、あなたが空地を作ったらそこにはこんな価値が生まれます、市街地をコンパクトにまとめた地域にこんな価値ができます、と。ストック型にして何世代も使える様にしたら、後の世代がいかに豊かになるか、資源がどのように安定するか、総てデータとして見られるようになります。このようにして次世代の日本人を守る。これが野鳥の会から始まった、今のミッションです。

市田 すごいねえ。

岡本 内閣府地方創生本部が、一

般向けのアニメーションも制作しました。特に、小学生、中学生に見てもらいたいです。それによって自分達の意志でこんな町をつくらうと考えながら、実際に投資出来るところから投資をやっていく、と。このプロジェクトにはレベル1から3まであって、今はレベル1ですが、プロタイプを作ったらオープンにして、もう1回、考え方を含めたシステムそのものを大学や研究機関に公募します。それでブラッシュアップし、レベル2では、実際に都市設計が出来るようになっていく。多様な分野の学生や専門家だけでなく普通の市民もネット上で、持続可能な夢のある地域設計に参画できるようにする。そこには、資源評価や環境評価、経済評価等様々な評価軸があります。レベル3では、そこに対して投資が入れるよう考えられています。初期投資は高いけど世代を超えたらコストは抑えられます。そもそも人口減少社会では将来的に掘った埋めたりする人がいません。

市田 電柱はありませんね。

岡本 想像してみてください。醜態に絡み合う電線・通信線と電柱が消

えた日本の景観は驚くほど美しくなります。

市田 ゲームで、『シムシティ』というのがありましたね。

岡本 今は『シティーズ・スカイライン』という、もったいいのがあります。この地域応用版が出来ると考えてもらえば理解いただけると思います。世代を超えた大事業、地域づくり・日本の未来づくりは、多くの人が楽しく参画しなければ成し遂げられないと思います。日本野鳥の会を作り上げてきた過程のように。

市田 岡本さんは精力的に活動を続けておられますが、これからの目標は？

岡本 きれいな引き際ですね。この近未来地域づくりの事も、40代の大学の先生や官僚の方達が一所懸命やっていますから、やれるところでパッと消える方がいいと思います。「どういう死に方をするか」も考え始めています。とにかくピタッと終わるのがいいなと思っています。

市田 岡本さんらしいですね。今日はありがとうございました。

岡本 こちらこそ、ありがとうございました。